

『学びたい』が沸き上がる教室

いとう ひろき 伊藤 博紀（中学）・にしむら そうたろう 西村 聡太郎（高校）

I. はじめに

現行の学習指導要領では「主体的・対話的で深い学び」の視点が示され、子どもが主体的に学ぶことが求められている。授業改善の視点の中でも特に「主体的」の部分に焦点化して『学びたい』が沸き上がる教室」を国語科の教科テーマとして設定した。

中学校では、文学的テキストのリテラシーを育む題材として長編アニメーション作品を選定した。生徒たちにとってより身近な題材を設定することによって「作品の魅力を明らかに」という学習動機が高まることを期待している。単元の計画については、生徒が作品を読み楽しむための観点を設定し、作品を繰り返し視聴して分析を行う、いわゆる課題探究的な学習を設定した。生徒自らが読みの視点を設定することが、根気強くテキストの分析を行う意欲を高めることに期待したい。

高等学校では、昨年度始まった新カリキュラムの中で、「文学」や「古典」を扱う時間が実質的に削減されたことを踏まえて、生徒たちがそれぞれ納得できる「古典を学ぶ意義」を持つことを目的として今回の単元を計画した。教材はなるべく多くの観点から分析し得るものとして、『源氏物語』から「光源氏の誕生」（桐壺巻の冒頭部）を選定している。これにより生徒たちの分析が1つの型にはまったものでなくなり、グループ活動を行った際違う考えを持った者同士が、相互に批判しあいどちらの意見でもない新たな意見を産むことを目指した。

II. 授業1の記録

本実践では、2022年に公開された新海誠による長編アニメーション映画「すずめの戸締まり」を題材に設定した。このような非言語テキスト、いわゆるマルチモーダル・テキストを題材とした実践はこれまで国語教育においても繰り返し行われてきた。また、近年では「探求的な学び」のもと生徒自らが発見・設定した課題を学級の課題として学習が求められている。マルチモーダル・テキストを用いて探求的な学習を行う際に課題となるのは生徒への教材の提示の仕方だ。本単元では学習班に1台ずつDVD

プレーヤーを用意し、各々のタイミングで映画の任意の場面を再視聴出来る環境を整えた。

研究会当日の授業では、学級全体で一度目の視聴を終えた後で、この後自分の班が再視聴する際に着目したいポイントを整理する取り組みを行った。グループワークの際には、それぞれの生徒が発見した「色」や「蝶」などの観点を共有し合う姿が見られた。授業終了時にはどの班も次回以降見直したい観点を発見しており、その記述量の多さからも今後繰り返し映画を視聴するモチベーションの高まりを見取ることが出来た。

III. 授業2の記録

本実践では、第2学年を対象とし、『源氏物語』の冒頭部を使い、「古典をなぜ学ぶのか」を生徒自身が探究的に学ぶ授業実践を目指した。

本単元では単なる感想となってしまうのを防ぐため、個人で作品の分析を行ったあと、その分析を踏まえたうえで古典を学ぶ意義を考えるようにした。4人程度でグループを組み、その中の全員が納得するように活動をさせている。

本来であれば班ごとに古典を学ぶ意義を発表するところを見ていただく予定であったが、研修旅行による体調不良者が多く出たため学年閉鎖となり、班で発表のための活動をしている時間を見学していただくことになった。

加えて当日も、クラスの半分弱の生徒が欠席する中で授業をすることになった。しかしそのような状況でも、登校してきた生徒たちは多くの見学者が居る中、非常に活発に活動に取り組んでいたように思う。また、参観してくださった先生方も積極的に生徒たちと交流をしていただいたので、多様な専門的知識・思考を吸収することができたようであった。

今回の学習を経て、授業の予習への取り組み方を見ても、古典の学習に意欲的になった生徒が増えたように思う。

次に中学校、高等学校の順に教育研究会当日に配布した学習指導案を掲載する。

国語科学習指導案

2023年11月11日（土）9時25分～10時15分

大阪教育大学附属高等学校天王寺校舎 4階 II年D組教室

国語科 教科テーマ

「学びたい」が沸き上がる教室

中学校 授業テーマ

探求的に長編アニメーションを“読む”授業実践

～新海誠作「すずめの戸締まり」を題材に～

大阪教育大学附属天王寺中学校 伊藤 博紀

I はじめに ～教科テーマ・授業テーマについて～

(1) 「学びたい」が沸き上がる教室をめざして

現行の学習指導要領では「主体的・対話的で深い学び」の視点が示され、子どもが主体的に学ぶことが求められている。授業改善の視点の中でも特に「主体的」の部分に焦点化して「『学びたい』が沸き上がる教室」を国語科の教科テーマとして設定した。

中学校では、文学的テキストのリテラシーを育む題材として長編アニメーション作品を選定した。生徒たちにとってより身近な題材を設定することによって「作品の魅力を明らかに」という学習動機が高まることを期待している。単元の計画については、生徒が作品を読み楽しむための観点を設定し、作品を繰り返し視聴して分析を行う、いわゆる課題探究的な学習を設定した。生徒自らが読みの視点を設定することが、根気強くテキストの分析を行う意欲を高めることに期待したい。

(2) アニメーション映画（マルチモーダル・テキスト）を用いて育むリテラシー

反復表現・語り・物語構造など、私たちが物語や小説を享受する際には様々な言葉の表現を手がかりに作品に分け入ろうと試みている。これまでの国語科では、紙媒体で印刷された活字テキストを題材に言語リテラシーの教育がなされてきた。

しかし、近年の高度情報通信化社会の発達に伴って、子どもたちを取り巻く日常言語環境は劇的な変化を迎えている。現代の中学生の大半は自分用のスマートフォンやタブレット端末を所持しており、暇つぶしに動画・音楽配信サイトを視聴しては、自らが撮影した写真や動画を編集しBGMやコメントを加えてSNSにアップロードする。このような行為は現代の子どもたちにとって、もはや何の変哲もない日常の営みと化している。それに伴って、子どもたちが物語に触れる機会も活字だけではなく、漫画やアニメ・映画など様々な媒体に拡張されつつある。ともすれば、現代の生徒が国語科の授業で学ぶ文学的文章の「構造と内容の把握」や「精査・解釈」の能力は、活字を読むことと同様に、あるいはそれ以上に漫画やアニメなどのマルチモーダル・テキストに触れる機会に活かされる可能性があるかもしれない。

そこで、現行の学習指導要領や教科書教材でマルチモーダル・テキストに関連する学習項目がどのように扱われているのかを整理したところ、3学年とも「知識及び技能」の(2)「話や文章に含まれている情報の扱い方に関する次の事項を身に付けることができるよう指導する。」の部分に学習内容が示されていた。

学年	学習指導要領との関連 (知識・技能)
1	(2)イ 比較や分類，関係付けなどの情報の整理の仕方，引用の仕方や出典の示し方について理解を深め，それらを使うこと。
2	(2)イ 情報と情報との関係の様々な表し方を理解し使うこと。
3	(2)イ 情報の信頼性の確かめ方を理解し使うこと。

さらに、上記のように学習指導要領で示された学習内容に対応して、教育出版の教科書では以下のような教材が設定されている。

学年	教材名	学習指導要領との関連 (知識・技能)	学習指導要領との関連 (思考・判断・表現)
1	メディアと表現 全ては編集されている 池上彰／写真で「事実」を表現する	(2)イ	B(1)ア C(1)ウ B(2)イウ C(2)ウ
1	メディアと表現 広告の情報を考える	(2)イ	B(1)ア C(1)ウ B(2)イ C(2)ウ
1	メディアと表現 漫画で「物語」を表現する	(2)イ	C(1)ウ C(2)ウ
2	メディアと表現 SNSから自由になるために 高橋暁子／脚本で動きを説明する	(2)イ	B(1)ア C(1)ウ B(2)イウ C(2)イウ
2	メディアと表現 映像作品の表現を考える	(2)イ	C(1)ウ C(2)イウ
3	メディアと表現 メディア・リテラシーはなぜ必要か？ 森達也／新聞が伝える情報を考える	(2)イ	C(1)ウ C(2)ア
3	メディアと表現 ニュースで情報を編集する	(2)イ	B(1)ア C(1)ウ B(2)イ C(2)ア

表中の網かけ処理を施した部分は特に文学的文章の学習と関連した項目だ。当該単元の教科書の学習目標を確認したところ、1年生では「漫画で『物語』を表現する」の単元において「漫画の表現の特徴について理解する。」「漫画の中の絵と言葉との関係を捉え、読み手に対する効果を考える。」の2つが設定されており、2年生では「映像作品の表現を考える」の単元において「絵コンテを構成する情報を整理し、それぞれの効果について考える。」「漫画と絵コンテの描写の違いを理解する。」の2つが設定されている。

漫画の学習においては「絵と言葉の関係性」、映像作品の単元においては「絵コンテを構成する情報（画面の構図・人物や物の動き・カメラの動き・セリフや効果音・場面の時間）」のように、学習指導要領で示された「情報と情報の関係」の部分に対して多様なモード（言語様式）を扱う姿勢が見られる。

以上のような現代の子どもたちを取り巻く言語環境の変化と、教科書における学習目標の特徴を鑑みて、**本実践ではこれまでの国語科で伝統的に実践されてきた文学的文章の分析・解釈の方法を映像テキストに転用することを試みた。授業の実施にあたっては、マルチモーダル・テキストを用いたメディア・リテラシーの教育を国語科の枠組みの中で行なっているイギリスの学習方法を参考にした。**

以下に引用するのは、英国映画研究所、English & Media Centre、Film Education、QCAが協同で作成した『授業における動画テキストの活用とその指導—映画とテレビを使うための中学校教師用指導書（“Moving Images in the Classroom—A SECONDARY TEACHERS’ GUIDE TO USING FILM & TELEVISION” BFI, 2000）』の第2章に収録されている「国語科における動画を使った授業」を羽田（2020）が訳出し、文学における動画リテラシーの観点から整理したものだ。**主に、表中の編みかけを施した部分を参考に本実践の単元構想や学習の目標設定を行なった。**

		学習目的	学習活動	学習結果
		生徒は次のことを学ばなければならない。	生徒は、次の学習の機会を持つべきである。	生徒は、次の学習成果を期待できる。
A 文学における動画リテラシー	A1 文学の基本	a1-1.文学の動画メディア版は、もとの活字メディア版とは異なっていること、そして、ひとつのテキストに新たな再話版が生まれるたびに、つくられた時代と社会状況によって、常に違っていきのどということ学ぶ。	a1-1.文学作品の複数の動画テキスト版を検討し、視覚的・聴覚的定番用法や配役、商品価値によって、どのように解釈が違ってくるか、制作された時代がそれぞれどのように反映しているかを比較する。	a1-1.文学テキストから選び出したシーケンスの撮影台本。同テキストの他の動画テキスト版との比較。
		a1-2.動画テキストの言語要素と、その他の要素の約束事をくよみ、分析することを学ぶ。	a1-2.動画テキスト版が、視覚的イメージと音の組み合わせによって効果を生み出す独自の方法を分析し、行為、状況設定、人物および語りを表現するむずかしさを御する文学テキストの方法とそれらを比較する。	a1-2.文学テキストの新しい動画版の制作ユニット。すなわち、配役、ディレクター、台本の扱い、広報キャンペーンが指摘できるパッケージユニット。
		a1-3.同作品の動画メディア版と活字メディア版を比べ、語りする方法などに、共通したところを見出しうる場合があるということ学ぶ。	a1-3. 語りの視点、著者の観点、年代順の構成、出来事の順序性、プロット構造を見て、動画テキスト版ならびに原作の文学テキストにおいて、語りが構造化される方法を比較する。	a1-3.文学テキストのテレビ短縮版の作成。そのとき、出来事の中には、要約、割愛されるものもあれば、新解釈が施されたり、最前面に取り立てられたりするものもある。
A2 文学の応用	a2.動画テキストにおいても印刷テキストとほぼかわりなく、比喻、象徴性、寓意性の活用をすることができるということ学ぶ。	a2.ある特定の映画、ビデオやテレビ番組のなかに、隠喩や象徴性と同等のものを見て取り、考察する。すなわち、記号として働く物体や照明、色彩の検討。たとえば、顔を横切る影は、往々にして悩みを抱えた、もしくは不安定な人格を代弁するといったこと。	a2-1.動画テキストにおける象徴的記号の用いられ方について理解したところを指し示す文章の作成。	
			a2-2.隠喩や象徴性を検討し、活用した、動画テキストの構想、台本、デザインの作成。	
			a2-3.詩的效果に匹敵するような視覚的工夫を施した、主要な詩作品の短編ビデオ化。	

※羽田潤 「国語科教育におけるメディア・リテラシー教育の研究—マルチモーダル・テキストの活用を中心に」 P 67—68
(編みかけの処理は本実践授業者による)

2 教材について

【作品の概要】

本教材は、約10年前の震災で母親と離別した高校生の岩戸鈴芽（以下「すずめ」）が、「閉じ師」の宗像草太（以下「草太」）と共に日本各地の「後ろ戸」を閉じる旅を描いた長編アニメーション映画だ。

まず、場面ごとの大まかな出来事を以下の表に整理する。なお、場面分けを行う際には主に物語の中での場所の移り変わりを規準とした。

場面	Time (時間:分:秒)	Cut	主な出来事	(物語内の) 場所
冒頭部 (第0場面)	～ 0:02:08	～ A 014	・回想 小すずめが母親を探しまわる	(常世)
第1場面	～ 0:23:23	～ A 354	・すずめが草太と出会う ・すずめが封印された要石を引き抜く ・廃ホテルの後ろ戸を閉める ・草太がイスと同化させられる ・ダイジン（封印が解かれた要石）を追ってフェリーに乗る	宮崎
第2場面	～ 0:39:00	～ B 253	・チカと出会う ・廃校の後ろ戸を閉める 愛媛	愛媛
第3場面	～ 0:57:43	～ B 596	・ルミと出会う ・遊園地の後ろ戸を閉める 兵庫	兵庫
第4場面	～ 1:10:40	～ C 277	・草太のマンションを訪れる ・芹澤と出会う ・東の要石が抜ける ・草太が要石になる ・すずめが要石（草太）を突き刺し、ミミズを封印する	東京
転換部	～ 1:20:46	～ C 474	・回想 イスを作る母 ・ダイジンに怒りをぶつける ・東京の後ろ戸を閉める ・宗像羊朗の病室に向かう ・草太の部屋に戻り、着替える	
第5場面	～ 1:37:20	～ D 213	・芹澤、環と合流する ・芹澤の車で岩手県へ出発 ・パーキングですずめと環が本音をぶつけ合う ・芹澤の車が脱線しり ・環がすずめを自転車に乗せて実家跡地へ向かう	東京～岩手
第6場面	～ 1:53:35	～ D 508	・過去の絵日記を発見する ・すずめの後ろ戸を発見し、常世に入る ・要石（草太）を引き抜き、ダイジンが要石に戻る ・2つの要石をミミズに突き刺して封印する ・小すずめを見つける ・小すずめにイスをわたす	岩手
エピローグ	～ 1:56:41	～ D 559	・閉じ師の使命を果たす草太を見送る ・岩手から宮崎に帰る ・冬になり、再び宮崎県を訪れた草太を迎える	岩手～宮崎

【物語の基本構造】

大きな枠組みとしては喪失と再生の物語の特徴が見られる。すずめが約10年前に震災の影響で母親と離別したことが物語の発端となる。その後、基本的には母親との離別という大きな喪失に対してすずめがどのように向き合い成長していったのかが中心に描かれる。

喪失に対して再生は第6場面の後半部に設定されている。具体的には、すずめが幼少期のすずめ（以下小すずめ）に母親の形見であるイスを譲る場面だ。物語の1つの山場でもあるこの場面において留意したいのは、すずめが過去の自分自身に母親のように語りかけイスを手渡す展開となっている点だ。第6場面の舞台となるのは「常世（とこよ）」という死者の世界だ。物語における常世の設定を活用した場合、すずめが母と死者の世界で会い語り合う中で過去の傷が浄化されるといったような物語展開を設定することも可能はずだ。しかしこの作品では、17才のすずめが4才の小すずめと出会うことになる。そればかりか、小すずめに母親と誤認される。自分が離別した母の代わりに自分自身が担って過去の自分を救う姿がクライマックスには描かれる。つまり、母親の喪失を自分の成長によって補う展開になっている点はこの物語の型としての特徴の1つだ。

そのため、作品内では第1場面から第6場面前半までの巻にすずめが17才の少女から擬似的な母親にまで成長する過程が描かれることになる。物語の序盤ではすずめに2つの大きな課題が描かれている。1つは母親の代わりに保護者となった叔母環との不和だ。環はすずめへの愛情と不安から過剰にすずめに干渉しようとしてしまう。すずめはその愛情を重いと感じながらも環本人に伝える事ができずに思い悩む。一方で環も幼いすずめ子育てをしたことで自分自身の人生の大切な時間を消費してしまったような負担感を感じている。すずめは日本各地を旅する中で成長し、事実上の母である環からひとり立ちすることになる。そのために必要だったのが旅先で出会う2人の女性達だ。1人目は愛媛県で出会う高校生のチカで、2人目は神戸でスナックを経営するシングルマザーのルミだ。チカの彼氏の自慢話を聞きながら恋愛を知り、ルミの子どもたちの面倒を見ながら子育てを知る。旅先の一時的なことではあるが、これからの人生で歩むだろう恋愛と子育ての疑似体験を行うことが、すずめの母親としての成長に繋がるのだ。そして、最終的には環と思いの丈を伝え合い、子どもであることから卒業していく。

環との不和を解消するきっかけとして互いの心の内を伝え合うことが必要だったが、物語序盤のすずめは戸惑うばかりの優柔不断な人物として描かれていた。さらに、その優柔不断さや自身のなさの根底には、すずめが生きる理由を見つけれないことが挙げられる。これがすずめの抱える2つ目の課題だ。そんなすずめが自らの意志で決断をできるようになるきっかけを作ったのが第1場面で登場する閉じ師の草太だ。すずめはイスの姿に変えられた草太と共に2箇所の後戸を閉める中で関係を深め、東京で草太を失った際には自分の中における彼の存在の大きさに気付く。草太と共に生きることがすずめにとっての生きる理由になると気付くのだ。

以上のようなすずめの変容が演出されているのが物語のエピローグだ。すずめは第1場面と同じ海辺の車道で草太と再開し「おかえり」といって物語の幕が閉じる。自分の生きる理由となった大切な人を、自分が幾度となく親から受け取ってきた「おかえり」の言葉で迎えることで物語は幕を閉じる。

3 単元の目標

○長編アニメーション映画（マルチモーダル・テキスト）の表現の特質を理解し、「すずめの戸締まり」の物語構造を分析しながら作品の魅力を捉えることができる。

知識および技能	思考力判断力表現力等	主体的に学習に取り組む態度
・多様な言語様式によって構成されるマルチモーダル・テキストの特徴について理解している。	・マルチモーダル・テキストを構成する多様な要素（ショットの構図・色彩・セリフ・音楽・効果音など）を手がかりに、物語の構造を捉えている。	・自らの感想を手がかりに、自発的に作品分析の観点を見つけ出そうとしている。 ・作品の全体と部分の関係を意識しながら、自立的に分析の観点を修正して作品を分析・解釈しようとしている。
関連する現行学習指導要領の内容		
第2学年 (2)情報の扱い方に関する事項 イ情報の整理 情報と情報の関係の様々な表し方を理解し使うこと。	第3学年C読むこと ア 文章の種類を踏まえて、論理や物語の展開の仕方などを捉えること。 ウ 文章の構成や論理の展開、表現の仕方について評価すること。	-

4 単元計画

時	学習の概要
(昨年度)	「すずめの戸締まり」予告編を視聴し特徴的な表現を発見する。 ・反復されるショット【鍵の開け閉め】 ・反復される言語表現【いただきます】 ・不自然に描かれるショット【鳥】や【靴】 ※中学2年生時（2022年11月）に実施
1	これまでの学習を振り返り、「すずめの戸締まり」本編を視聴する観点を整理する。 ・下記の作品の学習で学んだアニメーションの物語構造を分析する観点を再確認する。 「言の葉の庭」人物と人物を隔てる線・人物の位置関係 「天気の子」人物を囲む枠線・象徴的に反復されるショット ・その後「すずめの戸締まり（予告編）」を再視聴し、1回目の視聴の際に意識して見たい部分を整理する。
2～5	「すずめの戸締まり」を視聴し、鑑賞の記録を記入する。 ・「すごいな・工夫されているな」と思った部分、「よくわからない・不自然だ」と思った部分を記録する。
6 (本時)	「すずめの戸締まり」を再視聴する際に意識する観点を伝え合い、整理する。 ・2～4時の感想をグループで交流し合い再視聴して確かめたいことを検討する。 ・グループで見つけた意見を学級内で共有し、自分たちのグループが重点的に見直す観点を整理する。
7～9	グループごとに定めた観点から再視聴する。 ・ポータブルDVDプレーヤー活用し、グループごとに見たい場面を見直す。
10	グループごとに発見したことをクラス内で交流する。
11	「映画を100倍楽しむためのアドバイス～もう1度映画を見る人へ～」を作成。 ・現代ではサブスクリプションサービスなどで、気軽に映画を繰り返し視聴することができる。もう1度見直す時にはこんな部分を見てみると面白いという映画の紹介文を作成する。

5 本時の概要

(1) 目標

- ・ 作品の主題や表現の特質に関連する分析の観点を見出すことができる。

(2) 展開

学習過程	生徒の学習活動、内容	形態	指導上の留意点
導入 (8分)	<ul style="list-style-type: none"> ・ 本時の流れと今後の単元の流れを確認する。 ・ 作品のあらすじを思い出す。 ・ 前時に記入した物語の仮テーマを共有する 	一斉	
展開① (15分)	<ul style="list-style-type: none"> ・ 映画の視聴記録を見ながらもう一度映画を視聴する際に気をつけたい部分を班内で共有する。 	班	<ul style="list-style-type: none"> ・ 机間指導の際に各班の話し合いを聞き、話題の整理や考え方の助言を行う。
展開② (7分)	<ul style="list-style-type: none"> ・ ワールドカフェで、班同士の意見を学級内で交流する。 	班	
展開③ (10分)	<ul style="list-style-type: none"> ・ もとの班に戻り、その他の班から収集した情報を共有する。 	班	<ul style="list-style-type: none"> ・ 机間指導の際に各班の話し合いを聞き、話題の整理や考え方の助言を行う。
次回に向けて (10分)	<ul style="list-style-type: none"> ・ 他の班の観点を参考に、自分たちの班が重点的に見直す観点を決定し、班のワークシートに記入する。 	班	<ul style="list-style-type: none"> ・ 各班の話し合いの様子を見て、必要に応じて学級全体に問いを整理する助言を行う。

【参観される先生方へ】

本時は、生徒達が再視聴の時に見てみたいと思うことを単元のなかではじめて他者と分かち合う時間です。学級の生徒の実態として、全体の前で発言する時には「正解」のような意見や「良い」考えを言わなければ…と堅くなってしまう傾向が見られます。そこで、共有の場はクラス全体ではなく少人数の班とし、交流の中で自分が「本当に見直したい」と思っていることを言い表しやすい環境を作りました。7～9時間目では教師がそれぞれの班を回りながら、極力生徒の掲げた観点を活かしながら有意義な分析を行えるように助言を行います。

授業中の、特に黄色で網かけした部分においては、是非班の生徒同士の発話を聞いていただいて、生徒が話題にしていた再視聴の観点をこの後教師がどのように裁くのかをご検討いただけたらと思います。

6 参考文献

- ◇ 羽田潤（2020）『国語科教育におけるメディア・リテラシー教育の研究—マルチモーダル・テキストの活用を中心に—』溪水社
- ◇ 松山雅子編著（2021）『書くことの手を育むマルチモーダル・アプローチ—自己認識としてのメディア・リテラシーをめざして—』溪水社
- ◇ 松山雅子（2015）『イギリス初等教育における国語科教育改革の研究』溪水社
- ◇ 松山雅子編著（2005）『自己認識としてのメディア・リテラシー—文化的アプローチによる国語科メディア学習プログラムの開発—』教育出版
- ◇ 松山雅子編著（2008）『自己認識としてのメディア・リテラシー PARTⅡ—文化的アプローチによる国語科メディア学習プログラムの開発』教育出版
- ◇ 御木茂則（2023）『映画のタネとシカケ』玄光社

教育研究会 国語科・高等学校「古典探究」学習指導案

授業者 西村聡太郎

1. 日時 2023年11月11日（土）、10:30～11:20

2. 場所 大阪教育大学附属高等学校天王寺校舎 3階 II年D組 教室

3. テーマ 「古典をなぜ学ぶのか」を生徒が探究する授業実践

4. 教材名 紫式部「光源氏の誕生」（『源氏物語』桐壺巻から）

5. テーマについて

（1）中高共通テーマ 「学びたい」が沸き上がる教室

中央教育審議会答申において、高等学校の国語科の課題と科目構成の見直しについて次のような記述がある。「古典の学習について、日本人として大切にしてきた言語文化を積極的に享受して社会や自分との関わりの中でそれらを生かしていくという観点が弱く、学習意欲が高まらないことなどが課題として指摘されている。」¹

このような状況の中で、高等学校の新設科目「古典探究」において生徒たちの「学びたい」が本実践以降も持続されるような授業実践を行いたいと考えた。

（2）今、「古典をなぜ学ぶのか」を考える意味

2019年・2020年にかけて、「こてほんプロジェクト²」という運動がSNSを中心に流行した。簡単にまとめると、「古典は本当に必要なのか」という題目で、古典に対する肯定派・否定派が意見をやりとりするというシンポジウムからはじまった運動である。本校の生徒はそんなシンポジウムを知らずして、同じようなことを口にする。「なんで古典なんて勉強するんですか？」と。そこで、実際に「学習意欲が高まらない」生徒たち自身に「なぜ学ぶのか」を考えてもらうことにした。

本単元では『源氏物語』から「桐壺巻」の冒頭部が収録された教材、「光源氏の誕生」を中心として学習をすすめることとした。『源氏物語』は「我が国古典の最高峰³」と呼ばれることもある。『源氏物語』は「構成的ではあるが感情の内部に届かぬ男の文体と、個の経験に即してはいるが展開を欠く女の文体、この双方を止揚した」⁴作品だと言われ、「古典の良さ」を明らかにするためには読む必要があると考えた。また、英語訳されている・漫画化されている、など古典作品の中では他の作品との比較がしやすいという特徴もある。以上から「光源氏の誕生」を教材として選び、「古典をなぜ学ぶのか」を考えることにした。

¹ 「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について（答申）」、文部科学省、p127、最終アクセス 2023.10.24

² 勝又基 他、『古典は本当に必要なのか、否定論者と議論して本気で考えてみた。』、文学通信、2019
長谷川凜 他『高校に古典は本当に必要なのか』、文学通信、2021

³ 村上征勝・今西祐一郎、「源氏物語の助動詞の計量分析」『情報処理学会論文誌』40(3)、1999、p774

⁴ 西郷信綱、『源氏物語を読むために』、平凡社、2005、p280

6. 単元の目標

（1）学習指導要領の関連内容

【知識及び技能】

（2）ア 古典などを読むことを通して、我が国の文化の特質や、我が国の文化と中国など外国の文化との関係について理解を深めること。

エ 先人のものの見方、感じ方、考え方に親しみ、自分のものの見方、感じ方、考え方を豊かにする読書の意義と効用について理解を深めること。

【思考力、判断力、表現力等】

A 読むこと

ク 古典の作品や文章を多面的・多角的な視点から評価することを通して、我が国の言語文化について自分の考えを広げたり深めたりすること。

【学びに向かう力、人間性等】

言葉がもつ価値への認識を深めるとともに、生涯にわたって古典に親しみ自己を向上させ、我が国の言語文化の担い手としての自覚を深め、言葉を通して他者や社会に関わろうとする態度を養う。

（2）単元の観点別評価基準

	A 十分満足できる	B おおむね満足できる	C 指導の手立て	評価方法
知識・技能	古典などを読むことを通して、我が国の文化の特質について理解を深め、古典を学ぶ意義と効用について理解することができる。	古典などを読むことを通して、『源氏物語』の特質について理解を深め、古典を学ぶ意義と効用について考え、意見を述べることができる。	『源氏物語』の読解に焦点を当て、文法的事項を復習しながら現代語訳を捉えられるようにする。	テスト レポート
思考・判断・表現	古典の作品や文章を多面的・多角的な視点から評価することを通して、我が国の言語文化について自分の考えを広げたり深めたりすることができる。	古典の作品や文章を多面的・多角的な視点から評価することを通して、『源氏物語』について自分の考えを広げたり深めたりすることができる。	すでに学習している『落窪物語』や『伊勢物語』などと比較して、『源氏物語』の特徴を捉えられるようにする。	レポート Google フォーム ノート
主体的に学ぶ態度	古典などを読むことを通じて、「古典をなぜ学ぶのか」を積極的に理解しようとしている。	古典などを読むことを通じて、班での活動を行おうとしている。	物語以外の作品や年代の異なる作品も比較対象として示し、興味を引く。	観察 提出物

7. 指導計画（全8時間）

時	内容
1 3	<ul style="list-style-type: none"> ○『源氏物語』について学び、「光源氏の誕生」の内容を理解する。 ・『源氏物語』についての基礎知識を学ぶ。 ・「光源氏の誕生」の文法事項を確認し、現代語訳をする。 (4人1班で、予習として考えた現代語訳をお互いに訂正しあう。) ・「光源氏の誕生」を分析する。(特別時間割中の課題として)
4	<ul style="list-style-type: none"> ○アメリカの高校生とコミュニケーションをとることで、「光源氏の誕生」の理解を深める。 ・『源氏物語』と“The Tale of Genji” (translated by Arthur Waley) の冒頭部を比較する。 ・アメリカの高校生と共にその差が生まれた要因を考える。 ・どちらの文章の方が意味を理解しやすいかを考える。
5 6 (本時)	<ul style="list-style-type: none"> ○「光源氏の誕生」を中心として、「古典をなぜ学ぶのか」を考える。 ・「光源氏の誕生」と他のジャンル・他の時代の作品などを比較することでその特徴を捉える。 ・古典作品を授業で学ぶことの価値を、他人が納得できるように表現する。 ・現在の授業やカリキュラムについての提案・提言という形をとってもよい。
7	<ul style="list-style-type: none"> ○「古典をなぜ学ぶのか」を班ごとに発表し、各発表の改善点を指摘しあう。 ・5・6時で作成したものを元に「古典をなぜ学ぶのか」を3分程度で発表する。 ・より納得できる発表へとするため、発表者以外は発表に対して批判点を探し出し、それを指摘する。
8	<ul style="list-style-type: none"> ○指摘された内容を踏まえ、考えた「古典をなぜ学ぶのか」を改善する。 ・7時で受けた指摘を班員で共有し、自分たちの発表資料に反映する。

《ご高評欄》

8. 本時の指導

（1）本時の目標

【知識・技能】

古典などを読むことを通して、古典を学ぶ意義と効用について理解することができる。

【思考・判断・表現】

古典の作品や文章を多面的・多角的な視点から評価することを通して、我が国の言語文化について自分の考えを他者が納得するように表現することができる。

【主体的に学習に取り組む態度】

発表し、聞くことを通じて、「古典をなぜ学ぶのか」を積極的に理解しようとしている。

（2）学習の展開 ※班で活動している際には、各班を見て回っていただけたら幸いです。

学習過程	生徒の学習活動、内容	形態	指導上の留意点
導入 (3分)	・本時の流れを確認する。	一斉	・今回作成した資料をもとに、次回は3分程度でポスターセッション形式で発表を行うことを伝える。
展開① (27分)	・班で前回話し合った内容をさらに具体的な資料にするため話し合いを行う。	班	・「みんな」が納得できる資料を作成することを目指し、最低限〔1主張、2根拠、3論の展開、4参考文献〕の4要素が書き出せるワークシートを配布する。 ・机間巡視において想定される反論や異なる立場からの意見を投げかける。
展開② (17分)	・実際に発表に使用する資料を作成していく。	班	・全体に対して時間で活動を区切ることはせず、各班の活動の進捗を見て必要に応じて促す。
次回に向けて (3分)	・次回の授業内容を予告する。	一斉	

9. 参考文献

- 勝又基 他、『古典は本当に必要なのか、否定論者と議論して本気で考えてみた。』、文学通信、2019
- 西郷信綱、「源氏物語を読むために」、平凡社、2005
- 長谷川凜 他、『高校に古典は本当に必要なのか』、文学通信、2021
- 村上征勝・今西祐一郎、「源氏物語の助動詞の計量分析」、『情報処理学会論文誌』40(3)、1999
- 「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について（答申）」、文部科学省、p127

IV. 研究協議の記録

当日の研究協議では、授業者がそれぞれの単元・授業についての簡単な発表をした後質疑応答を行った。その後、指導助言の小路口先生からお話いただいた。

本報告書ではそれぞれ抜粋し要約したものを記録とする。

(1) 発表者・司会・指導助言

中学校発表者：伊藤博紀（本校教諭）

高等学校発表者：西村聡太郎（本校教諭）

司会者：福西昌平（本校教諭）

指導助言者：小路口真理美先生（大阪教育大学教授）

(2) 質疑応答

① 生徒たちの中に、「蝶」や「死者」が表す象徴性について一般的な象徴性から作品内の表現にも言及していた班があった。蝶の死者の再生、人柱の話、たそがれどき、作者の世界観など、古典や作者の背景に準拠する表現もあるのではないかと。

→ 学年の中には作品の中での象徴性を正しく分析できている生徒もいる。今後は映画内での表現にも注目していきたい。

② 「古典をなぜ学ぶのか」という問いは、「古典をなぜ教えるのか」という批判的思考につながった。もし生徒たちが「古典を無くしてしまってもよい」という考えに至ったときにはどう指導するか。

→ 実際にそのような発言をする生徒もいた。その生徒は、「実用性がないから」という理由で古典は不必要だと言っていた。そこで「実用性のある教科」と古典を比較させ、そもそも「実用性」とはなにを指すかを言語化させることを考えさせた。

(3) 指導助言

中学校においても高等学校においても、「何を学習するのか」という問題領域の決定は教員の仕事となる。

そのためには、今回の単元でいうと、中学校ではさらなる映像教材の分析が、高等学校では古典作品の読みにおいて意見の相違を仕組む必要がある。

V. 今後の展望

本研究会では「学びたい」が沸き上がる教室のテーマのもと、生徒の主体性に働きかける実践を中高で行った。中学校ではマルチモーダル・テキストを題材に、高等学校では古典を題材に設定した。中高両実践を見比べると、これからの子どもたちに求められる新しい言語能力としてマルチモーダル・テ

クストを扱うことの可能性を探りながら、一方で伝統的に教材として扱われていながらも、近年学習カリキュラムの選択課程で削減されつつある古典を学ぶ意義を再確認する取り組みが行われていた。

教材の性質は違っていても、実践の手法としては中高共に生徒自らが学習課題を設定し解決していく単元を展開していた。しかし、生徒の主体的な学びは単元を設定するだけでは成立し得ない。生徒同士が課題を発見し共有する対話の場を教師がコーディネートする必要がある。まず、教師がその教材によって学ぶべき学習内容を見つけ出し、授業の中で生徒が語り合うべき問題領域が何かについて生徒間に共通認識を持たせなければならない。教材の価値を取りこぼさない教材分析と対話の場をコーディネートする教師の出方を今後も模索し続ける必要がある。

VI. 参考文献

(1) 中学校

羽田潤（2020）『国語科教育におけるメディア・リテラシー教育の研究—マルチモーダル・テキストの活用を中心に—』 溪水社

松山雅子編著（2021）『書くことの力を育むマルチモーダル・アプローチ—自己認識としてのメディア・リテラシーをめざして—』 溪水社

松山雅子（2015）『イギリス初等教育における国語科教育改革の研究』 溪水社

松山雅子編著（2005）『自己認識としてのメディア・リテラシー—文化的アプローチによる国語科メディア学習プログラムの開発—』 教育出版

松山雅子編著（2008）『自己認識としてのメディア・リテラシー PARTⅡ—文化的アプローチによる国語科メディア学習プログラムの開発』 教育出版

御木茂則（2023）『映画のタネとシカケ』 玄光社

(2) 高等学校

勝又基 他（2019）『古典は本当に必要なのか、否定論者と議論して本気で考えてみた。』 文学通信

西郷信綱（2005）「源氏物語を読むために」、平凡社
長谷川凜 他（2021）『高校に古典は本当に必要なのか』 文学通信

村上征勝・今西祐一郎（1999）「源氏物語の助動詞の計量分析」『情報処理学会論文誌』40（3）

文部科学省「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について（答申）」